

# 小学校外国語活動における適応性

濱崎孔一廊\*・高味淳\*\*・東園祐子\*\*\*

(2013年10月22日 受理)

## Adaptivity in Foreign Language Activities at Elementary School

HAMASAKI Ko-ichiro, TAKAMI Jun, and HIGASHIZONO Yuko

### 要約

平成23年度より、全面実施された新学習指導要領に基づき、小学校の第5学年および第6学年において「外国語活動」が必修化された。鹿児島大学教育学部附属小学校は、長年にわたり先駆けとなる研究に取り組んできた。そこで開発された指導法は多くの小学校へと徐々に伝わり、大いに活用されてきてはいるが、どのような理念に基づいて具体的実践の幅を広げていけばよいかなど、まだまだ探求すべき課題は多いのが実状である。

そこで、小学校で行う外国語活動はどうあるべきかを、今一度コミュニケーションの本質に立ち戻り、学部と附属小学校が理論と実践の両面から共同研究を行ってきた。共同研究の結果、辿り着いた根本理念は「適応性」ということであった。言語を介して人は意志伝達を図る。これが同じ言語共同体に属する者同士であれば、言語を介して十分に互いの意志を通じ合わせることが可能だが、共通する言語を持たない者同士が互いの考えを通い合わせなければならない状況に直面したときに、いかに対処すべきかは、グローバル化し異文化を基盤とする者同士の交流が増加しつつある今日、求められるべき能力である。そのような視点から適応性を活かす指導法のひとつの在り方として理論に基づいた実践の試みを提案する。

**キーワード**：外国語活動、適応性、コミュニケーション能力、I言語

---

\* 鹿児島大学教育学部 教授

\*\* 鹿児島大学教育学部附属小学校 教諭

\*\*\* 薩摩川内市立川内中央中学校 講師

## 1. はじめに

平成23年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施されたのに伴い、「外国語活動」が必修化された。全面実施にあたっては、長年にわたる準備期間を設けさまざまな予備的研究がなされてきた。しかし、新しく導入されたばかりのものであり、その実施方法については、まだまだ検討の余地が残されているように思われる。特に、「新学習指導要領・生きる力」においては、外国語活動の目標として「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と記されている。この中の特に「コミュニケーション能力の素地」という言葉は、小学校の次の段階にあたる中学校の学習指導要領では、「実践的コミュニケーション能力の基礎」という言葉に変わっている。似たような表現ではあるが違いがあり、両者に違いがあるとすれば、当然授業の在り方にも違いは反映されるべきである。

そこで、本論では、「コミュニケーション能力の素地」とはいったいどのように捉えるべきなのかということを経験的に考察し、その理論に基づいた実践の報告を通して、小学校における外国語活動の在り方について一つの提案をすることをその目的とする。

なお、議論は以下のように構成される。まず、2節では、Canale and Swain (1980)の提起したコミュニケーション能力のもととなる先行研究、すなわちChomsky (1965)の言語能力の検討から議論を始める。3節では、Chomskyの提唱する生成文法理論において、これをさらに進めたI言語という概念の検討に入る。4節では、以上の議論を踏まえてCanale and Swain (1980)で主張されたコミュニケーション能力の根本にある概念を探求する。5節では、これらの理論的考察に基づいた実践への応用を試みた結果報告である。

## 2. 言語能力と言語運用

Canale and Swain (1980)は、コミュニケーション能力 (communicative competence) の要素を提唱した。小学校外国語活動は、コミュニケーション能力に関わる活動であることから、コミュニケーション能力とは何かということを論じた彼らの議論は大いに参考になると思われる。そこで、この概念について改めて理論的に考察し、外国語活動への応用の可能性を検討していくことは、始まったばかりの小学校外国語活動において十分意義のあることだろう。

ところで、コミュニケーション能力という概念は、彼らの研究から突然生まれたわけではない。本来は、Chomsky (1965)で提唱された言語能力 (competence) という概念を批判する中から生まれた概念である。そこで、本節では、まずコミュニケーション能力という概念を導くもととなった言語能力の考察を進めていくことにする。

一般に、科学はさまざまな現象の背後に潜む原理や規則性を明らかにすることを通して、対象となる現象の本質を探ろうとする。その際、現実のさまざまな現象には、複雑な要因が複数絡んでいるため、個別の多様な現象に共通する特質が捉えにくい。そこで、個別の事象に現れ

た特異性を排除することによって、抽象化を進め、あらゆる現象に共通する一般性・普遍性を探るというアプローチをとるのが一般的である。Chomsky は言語現象に対しても、同じようなアプローチをとっている。すなわち、人間言語には共通の特質があるということは容易に推測されるが、言語話者は千差万別で、その言語の使い方には微妙な違いが多様にみられる。このような微細な違いを考慮に入れると、收拾がつかなくなり、言語の本質に辿り着くのは困難となるであろう。しかし、同じ言語共同体に属する言語使用者は、同一の言語を知っているはずであり、そこに何らかの共通性があるからこそ言語を介して互いの意志を通じさせることが可能になるはずである。

そこで、Chomsky は、言語理論が主として対象にすべきは、完全に均一な言語共同体に属している理想的な話し手や聞き手であると考えた。どの言語使用者も、自分が所属する言語共同体の言語を完全に知っているにも関わらず、その言語の知識は、記憶の限界とか、別のことに気が散ってしまうこと、あるいは、注意や関心を向けているものが途中で変わったためとか、言い間違い（散発的な言い間違いも、その人特有の間違いのいずれも）などによって、実際に発話するときには、文法的におかしな文を産出することがあるものだが、言語中枢に蓄えられた本来の完全な言語の知識は、そのような要因に影響を受けずに存在するものだと考えた。そして、この理想的な言語話者の脳の中に存在する能力を言語能力 (competence) と命名し、ときにそれが不完全な現れ方をする場合の言語運用 (performance) とは区別したのである。<sup>1</sup>そして、Chomsky の提唱する生成文法 (Generative Grammar) のような言語理論は、抽象化された理想的な言語話者の脳に内在する言語能力の方に関心を抱いている。

しかし、実際の英語教育、あるいは、より一般的にいうと言語教育では、実際上の言語運用の方が問題になってくる。したがって、理論言語学として言語能力の方を研究対象にするのは、それもひとつの研究の在り方としてありうるが、実際的な言語運用を問題にするような言語教育の場合には Chomsky のいう言語能力の方だけに依存するわけにはいかないのである。そこで、Canale and Swain (1980) の提唱するコミュニケーション能力 (communicative competence) の要素が登場するわけであり、これについての検証が必要になるが、その前に、もう少し Chomsky の考え方を見ておくことにしたい。

### 3. I 言語と E 言語

Chomsky (1986) では、I 言語 (I-language) と E 言語 (E-language) の区別<sup>2</sup>をすることが提案されている。これらの概念は、Chomsky (1995) 以降、現在なお進展中のいわゆる極小主義プログラム (Minimalist program) にも継承されている。Chomsky の考えによると、言語は何らかの構造を成しており、脳の中に内在化されたこの言語のしくみを用いて

<sup>1</sup> Chomsky の提唱した言語能力と言語運用のような区別は、構造主義言語学の祖である Saussure も行っている。前者に対応するものがラング (langue)、後者に相当するものがパロール (parole) と呼ばれている。

<sup>2</sup> より詳細な議論については、Chomsky (1986: 19-24) を参照されたい。

さまざまな言語表現を生成するのである。この人間の脳に内在化された言語(“internalized language”)を彼はI言語と名付けた。能力のような力とは違って、I言語は一定の構造をもつ脳内の要素であり、客観的に捉えることの可能性を秘めた研究の対象物になり得る存在物である。したがって、一見したところ言語能力と言語運用の区別とI言語・E言語の違いは似たようなものにみえるかもしれないが、同一とはいえない。さまざまな言語表現を生み出す構造を明らかにするのが理論言語学の関心事であり、そういう意味では、研究対象としてはI言語の方が適切であるとChomskyは考えている。

この人間の脳の中に内在するI言語に対して、外に現れる、つまり話し手によって産出される言語の方は外在化した言語(“externalized language”)ということで、E言語と呼ばれている。また、内在言語などのような言い方をせず、I言語と呼ぶのは、Iという頭文字に内的(internal)、個人的(individual)、内包的(intensional)という複数の意味を込めてより抽象化した概念を包括しているからである。E言語の方も、外的(external)、外延的(extensional)という概念を抽象化した表現である。

したがって、理論言語学ではI言語を研究の対象にするということはあるけれども、実際の言語教育には、言語能力やI言語だけでは不十分で、その実際の運用に関わる能力をこそ明らかにする必要がある。

#### 4. コミュニケーション能力

これまでみてきたように、Chomskyはあくまでも理論言語学の立場から、言語のしくみを探る一つのアプローチを提案してきており、これを実際の言語教育に応用しようなどとは一切考えていない。そこで、Canale and Swain (1980)は、Hymes (1972)の提唱したコミュニケーション能力という概念に注目し、これに対する考察を進め、コミュニケーション能力を構成する要素として次の4つの能力を挙げている。

すなわち、文法的能力(Grammatical competence)、談話能力(Discourse competence)、社会言語的能力(Sociolinguistic competence)、方略的能力(Strategic competence)の4要素である。第1の文法的能力は、文法的に正しい文を生み出す能力であり、第2の談話能力とは、独立した単一の文を発するのではなく、複数の文からなり、それらが内容的につながりのあるテキストを構成する能力をいう。第3の社会言語的能力は、言語の使われ方がその社会のさまざまな状況に応じて適切なものにすることができる能力である。具体的には、目上の人・年長者への言葉遣い、改まった席での適切な物言いなどができる能力である。第4の方略的能力は、共通の言語を有しない者同士でコミュニケーションを図ろうとするときに、主に非言語的方法を用いて何とかコミュニケーションを成り立たせようとするさまざまな工夫ができる能力である。

これらの中で、第1～3の能力は多かれ少なかれ言語に依存した能力である。したがって、十分には使いこなせない、あるいは、まったく通用しない、母語とは異なる言語を使わざるを

得ない場合には、第4の方略的能力を駆使することが理にかなっているのは、当然であろう。それゆえ鹿児島大学教育学部附属小学校でもこの方略的能力を子どもたちが活かすように働きかける指導方法の開発に力を注いできた。

しかし、それではコミュニケーション能力を構成する4要素のうち、他の能力は外国語活動に使えるのであろうか。そうとは限らないのではないかと、ということで、一つは談話能力に注目してみた。談話とは、複数の文から構成され、それらが内容の一貫性 (coherence) をもち、互いに結束性 (cohesion)<sup>3</sup> を保ちながら展開していくものである。コミュニケーションには必ず相手が必要となる。そうすると、少なくとも2人の人間の間で一貫した内容をもとに、コミュニケーションが継続していくことが求められる。対話者間で意志を伝え合う活動を行うためには、簡単なつなぎ言葉が分かれば両者のコミュニケーションにはつながりが出てくる。小学校の外国語活動では、英語に親しむことにより、簡単なつなぎ言葉であればある程度なじんでいるので、これを使って小学生なりの談話を形成する能力も十分発揮すると考えた。

文法的能力は、やはりある程度の言語能力を要求するし、社会言語的能力も場面に応じて適切な言葉を使うというのは、即、英語のスキルを求めることにつながるので注意が必要であろう。<sup>4</sup> となると、Canale and Swain (1980) の提起したコミュニケーション能力であっても、実際に小学校レベルで活用できるのは、主に方略的能力だけということになる。そうであれば、コミュニケーション能力といっても、実際にはその構成要素のうちの一部しか用いないということになる。

もちろん、コミュニケーションを図ろうとしている相手と自分の関係次第で、それらの4つの能力の発揮の仕方に差が出てくるのではあろう。が、対話者と自分との関係がどのようなものであれ、そこには何らかの共通した能力が認められるのではないだろうか。そこで、考え出したのが「適応性」という概念である。意志を伝えたい、あるいは伝えなければならない状況におかれたとき、相手と自分との言語を通したコミュニケーションがどれだけ可能かを探り、それぞれの状況に応じて適切に対処する力こそ適応性で、これがコミュニケーション能力の根幹に位置するのではないだろうか。以上のような仮説のもとに、さまざまな状況のもとで、その場に応じた対応をできるような工夫を試みることで、コミュニケーション能力も磨かれていくのではないかと考えた。

中学校の英語教育における「実践的コミュニケーション能力の基礎」と小学校外国語活動における「コミュニケーション能力の素地」の間にある違いは、適応性の発揮の仕方の差として捉えることが可能ではないか。まずは、言語によるコミュニケーションがまったく図れないか、あるいは、図れたとしてもそれはごくごく限られた範囲内に収まる場合の対応能力も一種の適応力であり、中学校におけるように、特定の外国語を学び始めたときには、その適応力は、当

<sup>3</sup> これらの詳細については、Halliday and Mathiessen (2004) を参照のこと。

<sup>4</sup> ただし、小学生なりにこれらの能力を発揮することはある程度可能かもしれないが、これについては今後の課題として、これ以上は立ち入らない。

該外国語の実際的な運用の基礎となるべきものと考えられる。そうすると、小学校での外国語活動が中学校の英語教育とはどのように違うのか、またこの両者の接続をいかに成すべきかということへの応用への展望が開けてくることも期待される。このような考え方をもとに、鹿児島大学教育学部附属小学校では、まず小学校段階での実践を試み、研究公開においてその成果を公表した。以下がその記録である。

## 5. 適応性を活かした外国語活動の実践

### 5.1 研究の目的

#### 5.1.1 研究の背景

グローバル社会を主体的に生き抜くためには、コミュニケーションを通して「適応性」を育む必要があると考えた。ここでは、その背景や考え方、外国語活動を学ぶ意義について示す。

政治や経済をはじめ、様々な分野でグローバル化が進展し、ひと・もの等が国を超えて一層流動する時代になってきている。このグローバル化は国際協力を基盤として、異なる文化の共存や持続可能な社会の発展に向かうよう努力することが必要であり、その重要な要素としてあらゆる段階でコミュニケーションがあげられる。昨今の東日本大震災では、他国から多くの支援を受け、多くの日本人が国際社会の一員として海外との結び付きを感じると共に、他国への情報発信の必要性やそれを支えるツールとしての外国語の重要性を改めて認識したとされる。このようにグローバル社会においては、国家レベルから個人レベルまであらゆる段階で相互依存関係が増大している認識を深めるとともに、コミュニケーションを通して互いの関係を深めていくことが大切である。

しかしながら、互いの認識や関係を深めることは必ずしも容易ではなく、コミュニケーションの過程において、人はしばしば言語や文化、考え方等の違い（壁）に直面する。例えば、互いのことを全く知らない外国の人に出会った時、また外国の人と交渉や折衝をする時はその典型であり、身近な友達同士で疎通を図る時であっても、その壁を意識させられることもある。大切なことは、言語や文化、考え方の壁に直面した時にそれを乗り越えたり、自分との距離を縮めたりしていくことであり、個々人がそうした資質・能力、態度をもつことである。我々は、言語や文化、考え方の違いに当たっても、相手とかかわり、適切に対応していく資質・能力、態度こそグローバル社会において重要であると考え、それを外国語活動における「適応性」と捉えた。

さて、この「適応性」という視点から日本人のコミュニケーションの状況を見たとき、外国語の使用への自信不足や異なる考え方への関心の低さから、コミュニケーションを十分に図っていない状況も見られる。また、外国語に関わらず、子どもたちの日常生活におけるコミュニケーションにおいても、自己や他者の感情や思いを言葉で表現したり、受け止めたりする表現力や理解力が十分でないとの指摘もある。さらに、他人の視点に立ったものの見方や考え方を踏まえる重要性も示されている。

これらの状況を踏まえ、平成23年度から全面実施された外国語活動を学ぶ意義を考えたとき、我々が目指す「適応性」を育む上で重要な役割を担っていると考えた。なぜなら、外国語活動は、外国語を通じて、異なる言語や文化への理解や相手とコミュニケーションを図る大切さや難しさを体験的に捉えることを目指した活動であり、まさに「適応性」を育むことを目指すことのできる学習の場と考えるからである。つまり、外国語活動は言語教育、国際理解教育の一環であり、活動を通して相手との壁を乗り越え、互いの見方や考え方を共有していける力や態度を培うことができる学習である。そして、この力や態度が土台となり、世界の人々と共存し、平和で住みよい社会を築くことにつながると考える。このような適応性をもった人を外国語活動が育成することのできる人間像として捉え、以下のように設定し、これまでの研究や子どもの姿を踏まえながら、外国語活動の充実をより一層図っていきたい。

我々は、これまで目指す子ども像を「コミュニケーションを通じて、自他と協調する喜びを味わう子ども」とし、コミュニケーション（態度・内容・方法）を見直し工夫することを通して、思いを伝えることのできる指導を図ってきた。その結果、互いに話し合いながらコミュニケーションを図る工夫をし、相手とかかわることに喜びを見出し、より積極的にかかわろうとする姿が見られた。しかしながら、以下のような課題も見られた。

- ① コミュニケーションを工夫する際に、意見や考えを伝え話し合っているが、互いへの働きかけが不十分である。
- ② 実際にコミュニケーションの工夫を図ったり、相手の話をしっかり聞いてうなずいたりして、相手のことをより理解しようとする姿が不十分である。
- ③ 相手に思いを伝える場合に、自分の見方や考え方を優先してしまい、やや一方的なコミュニケーションになってしまう姿が見られる。

これらの課題の要因を、以下のように分析した。

- ① 友達に対して働きかけ、共に高め合っていくことで得られる学びのよさを味わっていないのではないか。
- ② 相手によって言語や文化の違いがあることをよく理解しておらず、また理解することのよさを十分味わっていないのではないか。
- ③ 多様なものの見方や考え方に気付き、最後まで考えることでよりよいコミュニケーションを図ることができる体験を味わっていないのではないか。

この3つの要因の共通事項として、「よさ」を味わっていないことが考えられる。つまり、互いに協働することの「よさ」、相手を理解することの「よさ」、多様なものの見方や考え方に気付き、しっかりと考えることの「よさ」に気付くことで、コミュニケーションを図ることに意味を見出し、主体的に学ぶ子どもの姿がよりよく表出されるのではないかと考える。

我々は、「協働すること」「理解すること」「考えること」を外国語活動における「適応性」と捉えた。そして、これらの「よさ」に気付かせ、課題を解決することが重要であると考えた。そこで、目指す子ども像を以下のように設定する。

## 【目指す子ども像：グローバル社会に適応することのよさに気付く子ども】

## 5.1.2 研究の方向

外国語活動における7つの力や態度を意識することで、授業が変わり、子どもたちが「協働する」「理解する」「考える」よさに気付くことができるようになると考えた。

外国語活動の目標と前述の課題要因を踏まえ、「グローバル社会に適応することのよさに気付く子ども」を次のように捉えた。

他（相手や言語・文化）に対してかかわりながら、外国語によるコミュニケーションを通じて相手のことを理解しようとする態度をもち、思考・判断し、表現を工夫したり、多様なものの見方や考え方に気付いたりすることのできる子ども。

他（相手や言語・文化）に対して、かかわろうとする態度をもっている子どもは、互いに働きかけ合うことによって得られる喜びや自己の高まりに気づき、「協働するよさ」を感じている子どもであると捉える。

また、相手のことを理解しようとする子どもは、相手の考えをしっかりと最後までよく聞き、解釈していくことで自分と比較し、相違点や共通点があることに気付く楽しさを知り、相手を「理解するよさ」を感じている子どもであると捉える。

さらに、多様なものの見方や考え方に気付いている子どもは、相手意識をもち、伝える内容を豊かにするコミュニケーションについて知っており、物事を多面的に最後まで考えていく楽しさ、すなわち「考えるよさ」を感じている子どもであると捉える。

そこで、このような子どもを育成するために、外国語活動の目標と学力の3要素を踏まえながら授業を充実させていく必要があると考えた。本校では、外国語活動における学力の3要素を外国語活動の目標と関連付けて図1のように捉えた。そして、学力の3要素を高めると共に前述の課題要因を解決していくために、次頁表1のような必要性から外国語活動における「7つの力や態度」を見出した。つまり、目指す子ども像に迫るためには、表1のような7つの力と態度が必要であり、これらを発揮させていくことで学力の3要素が高まり、グローバル社会において必要な「適応性」を育むことにつながると考えた。

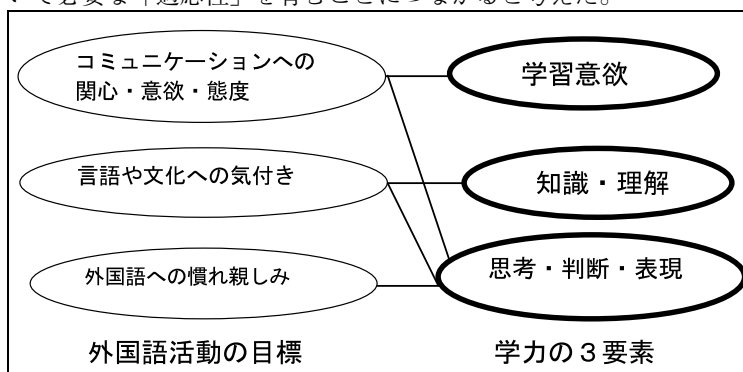


図1

外国語活動における学力の3要素



【表1 7つの力や態度の必要性と目標・学力の3要素との関係性】

課題要因	課題解決のために必要な力や態度	目標			3要素		
		関	気	慣	関	知	思
協働するよさを味わっていない	<p>社会においては、他とかかわっていくことが必然であり、またかかわっていくことで個が確立されていく。そのために、積極的に相手とかかわっていく態度(参加)が必要であり、また自分だけでなく周りの人にも働きかけ(協働)、互いに成長することのよさを実感していくことが必要である。</p> <p>さらに、思いを伝えるためには、どのような内容や方法で伝えるのか計画していく力(計画)が必要である。</p> <p>【計画性の向上】 【協調性の向上】</p>	<p>コミュニケーション活動に進んで参加する態度</p> <p>《参加》 ○</p> <p>コミュニケーションを工夫するために協働する態度</p> <p>《協働》 ○</p> <p>活動のゴールを予測し計画を立てる力</p> <p>《計画》 ○</p>					
理解するよさを味わっていない	<p>社会は、幅広く性質の異なるものが存在し、様々な事象が結合されたものであり、この結び付き(関連)を認識し、様々な考えから自分の考えを見直し(吟味)、互いを理解することで、確固たる自分の考えをもつことにつながる。</p> <p>【責任感の高揚】</p>	<p>自他の考えを吟味する力</p> <p>《吟味》 ○</p> <p>他を理解したり、尊重したりする態度</p> <p>《関連》 ○</p>					
考えるよさを味わっていない	<p>自分の思いを理解してもらうには、(多面的・総合的)にものごとを捉え、考える力が必要である。そして相手にしっかりと考えを伝える(伝達)ことで、次の活動へと生かされ、そのことが自分への自信につながる。</p> <p>【自己肯定感の醸成】</p>	<p>他のことについて多面的、総合的に考え、理解する力</p> <p>《多面》 ○</p> <p>コミュニケーションを図る力</p> <p>《伝達》 ○</p>					

適応することのよさに気付く子どもを育成するためには、7つの力や態度を發揮させながら学力の3要素を高める授業を創造していく必要がある。そのためには、他(相手や言語・文化)とつながっていきとすることが大切であると考えた。グローバル社会においては、思いを伝えるだけであったり、自分の考えだけで判断したりするのは互いに共存できない。どのようにすれば互いの壁を乗り越えていけるか見通しをもちながら、相手の思いをしっかりと理解するように最後まで聞いたり、話したりしていく力や態度が大切である。また、言語や文化の壁があっても、自分とのつながりとして捉え、生活の中で生かしていくことが大切である。その

ような力や態度が、自分への自信につながり、グローバル社会を生き抜いていける「個の確立を目指す」ことへとつながっていく。

このように、グローバル社会に適応するために必要な力や態度を育てる授業を創造することをねらいとして本主題を次のように設定した。

**【研究主題：他とのつながりから、適応性を育む外国語活動の創造】**

## 5.2 研究の内容

コミュニケーションを通して「協働するよさ」「理解するよさ」「考えるよさ」に気付く力や態度を育むために、どのような授業を創造していくのか。その考え方や研究内容の視点をまとめ、具体化していく。

### 5.2.1 「他とのつながりから、適応性を育む外国語活動」とは

「他とのつながり」とは相手の思いや考え、価値観等がたとえ異なる場合でも相手とかわかっていこうとしたり、言語や文化についてその多様性に気付き深く理解していこうとしたりすることである。また、「適応性を育む」とはコミュニケーションを通して「協働するよさ」「理解するよさ」「考えるよさ」を感じていく力や態度を育成することである。すなわち、「他とのつながりから、適応性を育む」とは目指すことのできる人間像に迫るように、身近な環境の中において適応することのよさに気付かせていくことである。

そして、「他とのつながりから、適応性を育む外国語活動」とは、学力の3要素を高めるために7つの力や態度を発揮させながら、表2のような子どもを表出していく授業である。

① 自他の考えを吟味する力《吟味》	・ もっと相手を思いやる表現の仕方考えた方がいいな。
② 学習のゴールを予測して計画を立てる力 《計画》	・ 学習課題を解決することができるように、どんなことをすればよいかみんなで学習の計画を立てよう。
③ 他のことについて多面的、総合的に考える力 《多面》	・ 相手や言語・文化をいろいろな見方で見ると新たな発見があるな。自分の考えや生活等と比べて考えよう。
④ 外国語を通じて、コミュニケーションを行う力 《伝達》	・ 学んだことを生かして、自分の思いを工夫して英語を使ってしっかり言ってみよう。
⑤ よりよいコミュニケーションを図るために協働する態度 《協働》	・ 友達がどのような英語を使っていいか困っている。アドバイスしてみよう。この表現や方法がいいよ、使ってみたら。
⑥ 他を理解したり尊重したりする態度 《関連》	・ ○○さんの英語をしっかりと聞くと分かったよ。もしかして生かすことができるかもしれない。どの意見も大切なんだな。
⑦ コミュニケーション活動に進んで参加する態度 《参加》	・ もっと相手と関わって、自分の視野を広げたい。 ・ 少し恥ずかしいけど、やってみよう。

【表2 7つの力と態度を発揮している子どもの姿の例】

私たちは、表2のような子どもを表出し、学力の3要素を高めるために、7つの力や態度を態度面と能力面に分け、これらが発揮させることで3要素が高まると捉えた。外国語活動はコミュニケーションを軸とする活動であるため、コミュニケーションにおける態度面、能力面

を育成する必要がある。そこで、態度面については7つの力や態度の『参加』『協働』『関連』、能力面においては『計画』『吟味』『多面』『伝達』を中心に発揮させていく。ただし、これらは個別に発揮されるものではなく、互いが連動しながら発揮されるものとして考える。

### 5.2.2 授業創造の基本的な考え方

#### (1) 主体的に活動する課題の設定と活動の計画（目標）

上記のような基本的な関係性を踏まえながら、目指す子ども像に迫るために、課題解決型の学習指導を展開することにした。課題を設定する際には、コミュニケーションを目的として、ある結果を出すために子どもが話したいと思える内容にする必要がある。また、子どもにとって身近であり、興味・関心が湧く内容、そして、「何だかできそうだけど、いや、なかなか難しそうだけど。」と思えるような内容の課題であることが重要であると考ええる。これらの要件を教師が踏まえ、子どもたちと課題を考えることでより主体的な活動が展開できると考える。

このような内容の要件を踏まえ、課題を子どもたちと設定する。そして、課題を達成していくために、どのような内容で、どのような方法を展開すれば学習のゴールに迫ることができるか、「計画」「参加」「協働」の力や態度を中心に発揮させる必要がある。なぜなら、子どもたちが主体的に協働して話し合いながら計画し、互いに活動していくことが学習意欲を高めることにつながると捉えるからである。

#### (2) 双方向のコミュニケーション活動の設定（内容）

課題を解決していくためには、意思疎通を図るような意味のあるコミュニケーション活動を展開する必要があるが、外国語活動における活動には様々な種類のコミュニケーション活動がある。

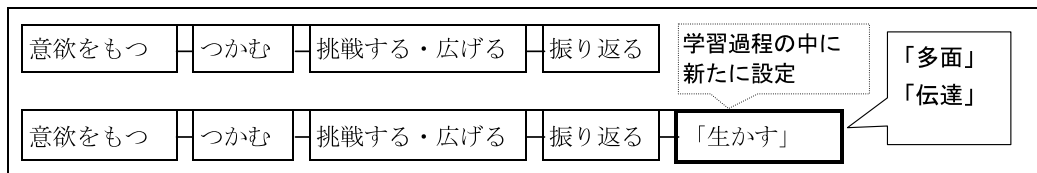
これらの活動には、例えばALTが発話した英単語をそのまま子どもが真似て発話するようなやや形式的なコミュニケーション活動から、自分なりの方法を考えながら互いに思いを伝え合うような活動まである。目指す子ども像に迫るためには、表4のように外国語の発話練習やチャンツ等、音声を繰り返すような活動、簡単なゲーム活動といった、やや形式的なコミュニケーション活動においても、子どもたち同士が双方向にコミュニケーションを図ったり、知的に楽しんだりできるような内容にしていくことが重要である。そのために、相手の考えを踏まえ自分の考えを「吟味」したり、相手とつながりを感じたり（「関連」）する力や態度を中心に発揮させていくことで、互いのことをより体験的に理解していくことにつながると捉える。

【表3 改善するコミュニケーション活動の種類】

種類	内容	7つの状態
音声の 繰り返し	○場面や文脈等を考えない一方向のもの 英語の発話練習, チャンツ等	「吟味」
場面や文脈に適 合したやりとり	○場面と対応し, ある程度意味のあるもの 簡単なゲーム活動や替え歌等	「関連」

## (3) これまでの活動を充実させる「生かす」過程の設定 (方法)




これまで子どもたちは, 自分たちで作成した作品やスキット (寸劇) を発表することを通して, 自己の高まりを感じていたが, 感想や意見を交流する中で, もう一度活動を見直して発表したり活動したりして, さらに自己肯定感を味わいたいようであった。そこで, これまでは学習過程として「振り返る」段階を一単元の終末としていたが, これまでの活動を充実させるために「多面」的な力や, 相手に思いを伝える力を「伝達」の力を中心に発揮させ, 自己肯定感を醸成させていく必要がある。そのために, 「生かす」過程を設定し, 2回目の課題に挑戦したり, 振り返ったことを生かすために, もう一度学び直したりすることにした。「生かす」過程の設定により, 子どもは自分の活動についてより考えたり, 表現しようと工夫したりする。このことが, 価値のあるコミュニケーション活動を具現化でき, 思考・判断・表現力を高めることにつながると考える。



次の表4は, 先に示した考えを踏まえ, 一般化した学習の流れである。

(実践例: 第6学年のJICA研修における学習の流れ)

【表4 課題解決活動の学習の流れ】

過程	主な学習指導	特徴
意欲をもつ	<p>1 子どもが話したくなるような課題の設定</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>JICA研修で外国の方が来られて、このクラスで交流することになりました。さて、外国の方と一対一でコミュニケーションを図るために、どのように対応すればよいか考え、実際に交流しよう。</p> </div> <p>2 主体的に考えるような条件の提示と計画を立てる場の設定</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>① 相手の名前, 年齢, 出身地等, 子どもは何も分かっていない。 ② 一対一で, 何とかしてコミュニケーションを図らなければならない。</p> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;">  <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・知らない英語が出てきたり, 沈黙が続いた時はどうしよう。</li> <li>・これからどうすればいいか一緒に考えながら, 計画を立てよう考えよう。</li> </ul> </div> </div>	計画協働
つかむ	<p>1 本単元に必要な発話練習, チャンス</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;"> <p>・一緒にやってみよう。</p> </div> <p>2 双方向のやりとりがある簡単なゲーム活動等</p>	参加
挑戦する・広げる	<p>1 個やグループによる活動内容・方法を考える場の設定</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実物をもって話すと相手に理解されやすいかも。</li> <li>・相手に失礼のないようにするにはどうすることが大切だろう。</li> <li>・自分のやり方では伝わらないかも。</li> </ul> </div> <p>2 学んだ英語を生かして発表, 活動させる場の設定</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;"> <p>・知っている英語を使って思いを伝えよう!</p> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;">  </div>	関連伝達
振り返る	<p>C コミュニケーションの見直し, 学びの振り返り</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ コミュニケーションを継続させるには, もっとこんな考え方もあるな。</li> <li>・ OOさんを助けてあげよう。もっと話せるようになるかも。</li> </ul> </div>	吟味
生かす	<p>1 再度, コミュニケーション活動を行う場の設定</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>前回話したJICA研修の方と, もう一度交流します。どのように対応すればよいか考え, 実際に交流しよう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>① 相手の名前, 年齢, 出身地等がおおよそ分かった。 ② 前回と同じ人と一対一でコミュニケーションを図らなければならない。</p> </div> <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;">  <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前回よりももっと伝わるように違う質問をするぞ。</li> <li>・意味が分からない時は, 聞き返す英語を使ってみよう!</li> </ul> </div> </div> <p>2 今後取り組んでいきたいことを考えさせるまとめの設定</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;"> <p>・もっと外国の人と話したり, 日本のことを教えたりしたいな。</p> </div>	多面伝達

### 5.2.3 授業の具体化

これまで述べてきたことを踏まえ、6年生の買い物単元の課題を改善・工夫をし、授業を具体化した。すると、子どもたちが「協働する」「理解する」「考える」ことのよさに気付き始めた。

#### － 第6学年“Let's Go Shopping!”（買い物ごっこ活動）から －

過程	これまでの活動	こう変える！	本研究における活動
意欲をもつ	課題設定「外国人のお客さんに日本のものを売ろう」	子どもがより主体的に動く課題の設定と活動の計画を実施	課題設定「外国の洋服屋で買い物をする際にハプニングが起きた。さてどうする？」 表現のイメージを拡大
つかむ	英語の発話練習 買い物の劇に必要な用具作成		主体的な英語の発話練習 英語をより多く使って話すための工夫 （「つなぎ言葉」の活用）
挑戦する・広げる	グループで活動の練習 買い物ごっこ活動の実際（客と店員に分かれる）	考えをしっかりとやりとりする活動の充実	グループでスキットの練習 隣接グループで相互評価し、活動をよりよく改善
振り返る	買い物ごっこ活動の実際（客と店員に分かれる） 学びの振り返り（感想交流）		半分のグループの前で発表 活動をよりよくするための話し合い もう一度スキットを発表 学びの振り返り（感想交流）
	活動をより充実させるための過程設定	生かす	

#### (1) 主体的に活動する課題の設定と活動の計画（目標）

##### 【ここでの課題】

これまで第6学年で行っていた「買い物」活動の内容は、子どもたちが画用紙に品物やお金、チラシ等買い物に必要なものを作って販売するという活動であった。中には、洋服やグローブ等の実物を持ってきて買い物を展開する子どもの姿も見られたり、チラシを作る際に外国の言語や文化に慣れ親しみながら、文字を写したりする姿も見られたりしたが、それを補うコミュニケーションの工夫が十分ではなかった。

また、子どもの発想を優先するあまり、買い物に必要な用具を準備させたり、作成させたりするための時間がかかるという課題もあった。

そこで、より子どもたちが主体的に活動し、また、十分にコミュニケーションを図ることができるようにするために、計画・参加・関連の力や態度を中心に発揮させるように以下のような課題を設定した。

##### 【今回設定した課題（テーマ）】

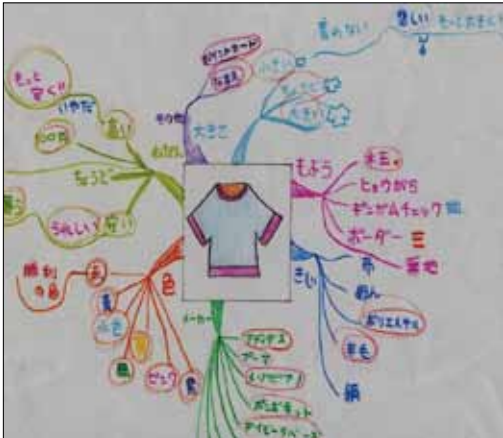
外国の洋服屋で買い物をする際にハプニングが起きた。さてどうする？

これまでは、品物を洋服、スポーツ用品、鹿児島の特産物等、広く扱わせることで活動への意欲は高まったが、英語の使用域が広がってしまい、互いのコミュニケーションが十分に図れないという姿が見られた。そこで、ここでは、扱う買い物の品物を洋服に限定した。洋服は子どもたちにとって身近で興味があるものであり、背景知識もある程度豊富であると捉える。そのため、これまで学んだ英語を幅広く使えると考えたからである。



【写真 課題に興味を高める子ども】

次に、洋服の英語のイメージを膨らませるために、マインドマップを活用した。子どもたちがこれまで慣れ親しんだ英語や知っている英語を思い出し英語をたくさん使ったスキット（寸劇）を作れるようにした。



【写真 マインドマップの活用例】

さらに、設定した課題を解決していくために、活動の見通し（計画力）を發揮させながら、「絵コンテ」（絵や文字の入った設計図）を使用し、表現させた。絵等を使用しながら言葉やスキットの内容を整理していくにつれて、自ずと必要になる言葉やジェスチャーを表出することができた。そして、作成段階において、主体的に協働する態度を發揮させるながら、知りたい単語や表現を辞書で調べさせることで、友達とスキットを作り上げていこうとする姿が見られた。辞書の使用については、本校では、買い物の英語表現に第1学年から慣れ親しんでいるため、文字への興味が高まったことから取り入れたものである。



【写真 絵コンテの活用例】

これらのことから、子どもが話したくなるような課題の設定と活動の計画を立てさせる働きかけは、7つの力や態度を發揮させながら、学習意欲を高めるのに効果的である。

これらことから、子どもが話したくなるような課題の設定と活動の計画を立てさせる働きかけは、7つの力や態度を發揮させながら、学習意欲を高めるのに効果的である。

## (2) 双方向のコミュニケーション活動の設定

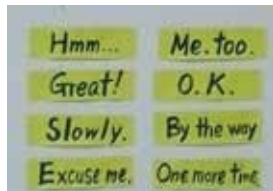
## 【ここでの課題】

- ① 慣れ親しんでいる買い物の英語の数が限られており、コミュニケーションの継続が十分に図られず、相手を理解したり、思いを最後まで伝えたりしようとする姿が十分に見られなかった。
- ② ALTが主体となった発話練習については、使用する英語に慣れ親しむ上では効果的であったが子ども同士のつながりがあまり見られず、やや形式的なコミュニケーション活動になってしまう。

## &lt;① 解決するための取組&gt;

子どもたちが主体的に英語やジェスチャー等を使い、コミュニケーションを図ることのよさに気付くために、吟味する力を発揮させながら「つなぎ言葉」を活用させるようにした。「つなぎ言葉」とは、相手を理解するために問い返したり、共感したり、称賛したりする等の会話を継続させたり、意味をもたせたりする短い言葉である。この「つなぎ言葉」の活用によって、コミュニケーションの仕方がより分かり、互いを理解したり尊重したりする態度に結び付くと考えた。

会話の中であいづちや反応をするときや、続きを言いたい時等で多く使われる言葉を「つなぎ言葉」と言います。使うことでどんなよさが考えられますか。



- ・相手が何を考えているか分かる。
- ・ほめられるとうれしい。
- ・1年生の頃から、何気なく聞いて 知っただけで こうして学ぶと面白いな。

コミュニケーション活動でこの「つなぎ言葉」が積極的に使えるように、授業の導入に“and you?”や“One more time.”等の言葉を使用する「Communication Time」活動を設定した。次に示すように1回目は自分の今の気分、2回目は本時に必要な基本的な表現を提示し、それに沿ってコミュニケーションを図らせた。

- 一回目
- C1 : What color do you like?  
 C2 : I like blue, and you?  
 C3 : No. I like red, and you?  
 C4 : Oh, Me, too!

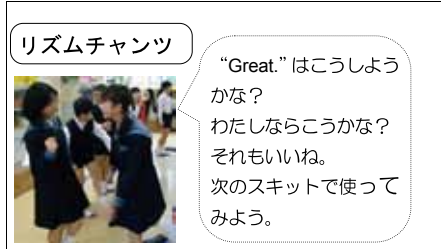
このように、「つなぎ言葉」の活用によって、自分の考えや相手に思いを伝える方法を吟味することで、以前より積極的にコミュニケーションを図ったり、相手を理解しようとしたりする姿が見られた。このことから、「つなぎ言葉」という簡単な英語でもその働きを考えさせて使わせることは、他とのつながりを生み出し、

相手をより理解できることにつながると考える。



### <②を解決するための取組>

②の課題を解決するために、これまでの自分のコミュニケーションの仕方を見直す力（吟味）や相手に関わろうとする参加の態度を発揮させながら、「つなぎ言葉」に主体的に慣れ親しむために、その言葉に合うようなジェスチャーを考えさせた。そして、音楽に合わせて自分たち



で考えたジェスチャーを使い発話する際も、双方向のやりとりをさせながらジェスチャーの違いに気付かせたり、コミュニケーションを図る楽しさを感じさせたりするようにした。この働きかけにより、形式的なものから相手のことをより理解しようとする活動が展開することができた。

### (3) 活動を充実させる「生かす」過程の設定

#### 【ここでの課題】

「買い物ごっこ活動」を1回だけして学習のまとめとしていたが、これまでの活動の成果を十分に生かし切れなかったり、活動への達成感を十分味わったりできなかった。

多面的なものの見方や考え方を発揮し、自分たちの発表内容やコミュニケーションを見直し、もう一度発表会する機会を設定した。前述したつなぎ言葉を黒板に貼って改めてそのよさを確認し、できるだけたくさんの英語を使って思いを伝えるようにした。（伝達）あるグループにおいては、外国のレジで買い物をするという場面から、自分たちの生活でもよく起こりえる、欲しいものを通販で購入し、品物が実際に郵送で届くという内容に改善したところも見られた。活動をより身近な内容にすることで、2回目の発表では英語をより多く使ったり、場に合ったジェスチャーする等、伝達の力を発揮する姿が見られた。

## 5.3 研究の成果と次年度計画

### 5.3.1 研究の成果

#### (1) 表出された子どもの姿

- ① 課題解決を目的として協働し合いながら、主体的に取り組む子ども

課題を解決していくために見通しをもち、友達と協働し合いながら活動を計画していく姿が見られた。 【計画・協働性の向上】

- ② 思いを伝え合い、相手を理解しようとする子ども

思いを伝えるだけでなく、相手の思いを理解しようと問い返したり、うなずいたりしながらしっかりと最後まで聞く姿が見られた。 【責任感の高揚】

- ③ コミュニケーションを工夫しようとする子ども

互いの意見を基に、コミュニケーションを多面的に見直し、活動をやり直すことで、外国語を使う楽しさを味わったり、自信をもって活動したりする姿が見られた。

【自己肯定感の醸成】

## (2) 表出した子どもの姿の要因

## ① 協働し合いながら、主体的に取り組む姿が表出された要因について

これまでの研究や子どもの課題から本校における課題解決活動の要件を設定したことが、子どもの活動への意欲を高めることができたと考える。

## ② 思いを伝え合い、相手を理解しようとする姿が表出された要因について

これまでの活動を思いを伝え合う双方向のコミュニケーション活動に改善したりつなぎ言葉等の短い英語を生かしながら相手を理解させようとしたことが要因であると考ええる。

## ③ コミュニケーションを工夫しようとする姿が表出された要因

学習過程に「生かす」過程を設定することで、コミュニケーションを図る楽しさや、学びのよさを感じさせることができたと考える。

## 5.3.2 次年度計画

- ・ 発揮させたい7つの力と態度を重点化することによって、7つの力や態度かどのように学力の3要素を高めることにつながるのか、さらにその関係性を追求する。
- ・ 本校における課題解決活動の要件を踏まえ、新たな指導計画を作成する。
- ・ 一単元の学習過程の「つかむ」「挑戦する・広げる」における学習内容や指導方法を充実させる。

## 参考文献

- Canale, Michael and Merrill Swain (1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing." *Applied Linguistics* 1: 1-47.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Halliday, Michael A. K. and Christian M.I.M. Mathiessen (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. Third edition. Arnold, London.
- Hymes, D. (1972) "On Communicative Competence." In J. B. Pride and J. Holmes (eds.), *Sociolinguistics: Selected Readings*. Penguin Books, Harmondsworth.
- 鹿児島大学教育学部附属小学校 (2013) 『個の確立を目指す授業の創造』(鹿児島大学教育学部附属小学校平成25年度研究論文集)
- 文部科学省 (2010) 『小学校学習指導要領解説：外国語活動編』 東洋館出版社、東京。
- Sassure, Ferdinand de (1916, 1972, 1985) *Cours de linguistique générale*. Éditions Payot, Paris.